

Farm Report

新冠タガノファーム

新冠町明和

タガノビューティーのふるさとを訪ねて。

重賞初勝利が7歳秋のJBCスプリント（JpnI）という離れ業をやってのけたタガノビューティー。デビューから2連勝をおさめて朝日杯フューチュリティS（G1）でも4着した同馬に“大器晚成”という言葉は当てはまらないかもしれないが、デビュー38戦目、重賞挑戦19回目にしてようやくたどり着いたビッグタイトルだった。

タガノビューティーの生まれ故郷は、新冠町明和の新冠タガノファーム。かつて京都馬主会の会長を務めたこともある八木良司オーナーが2003年に立ち上げた牧場で、その前年に創設された宇治田原優駿ステーブル（京都府）を含め、サラブレッドの生産から育成までを一貫して行うオーナーブリーダーである。これまでにタガノグランパ（14年・ファルコンS）、タガノジンガロ（14年・かきつばた記念）、タガノエスプレッソ（14年・デイリー杯2歳S、障害重賞3勝）、タガノアザガル（15年・ファルコンS）、タガノトネール（15年・サマーチャンピオン、16年・武蔵野S）、タガノディグオ（17年・兵庫チャンピオンシップ）など多くの活躍馬を送り出してきたが、生産馬のG1級競走優勝はこれが初めてだった。

「当日のJBC2歳優駿にタガノマカシヤ（八木良司オーナー、八木牧場生産）が出走していたので、タガノビューティーのレースは門別競馬場のモニターで見ていました」

と話すのは、創業時から八木オーナーの右腕として新冠タガノファームをいっしょに創り上げてきた田沼正美さん。それ以前は名門・荻伏牧場で長年勤務しており、八木オーナーとはその頃に知り合ったと言う。

「佐賀競馬場は小回りで直線が短く、いつものように後ろからだと脚を余してしまいそうなので、『たまには前で競馬をしてくれないかな…』と話していたら、向正面で上がっていって3コーナーをまわったら先頭に立ったでしょ。ビックリしちゃって。驚いているうちにゴールを迎えて、『えっ！？ウソでしょ？ 勝っちゃったの？』という感じでした。レースのあとあまり実感がわいてこなかったのですが、牧場に戻ると次から次にお花やお祝いが届き、改めて『ビューティーは凄いことをやってくれたんだなあ』と感激しました」

かしわ記念（JpnI）は23年、24年と2年づけて2着、24年のフェブラリーS（G1）でも僅差の4着とあと一歩のところまで迫っていた悲願のG1級タイトルだが、その瞬間というのは意外とあっさり訪れるものなのかもしれない。

「オーナーも相当うれしかったんでしょうね。お孫さんに聞くと、早朝から何度も何度もレースを見返しているそうです（笑）。それを聞いて『少しはオーナーに恩返しができたかな…』とスタッフみんなで思っているんです」

パートを含めて 11 名で 30 頭の繁殖牝馬を管理している新冠タガノファーム。ベテランスタッフが多く、配合はみんなで話し合って決めているそうだ。

「タガノビューティーの母スペシャルディナーはオーナーが懇意にしている深見富朗さんの所有していた競走馬で、引退後に譲り受けてうちで繁殖生活を始めました」

すると、2番仔のタガノブルグ（牡、父ヨハネスブルグ）がNHKマイルカップ（G1）で2着する活躍を見せ、6番仔のアイトーン（牡、父キングズベスト）は若葉Sに勝って皐月賞（G1）や菊花賞（G1）にも出走。そしてヘニーヒューズを交配して生まれた8番仔がタガノビューティーだった。

「不思議とこの血統は牡馬がよく走るんですよ。タガノビューティーは競馬に行くと気の強いところを見せているようですが、牧場にいる頃は手のかからない素直な性格の馬でした」

新冠タガノファームの放牧地で健やかに育ったタガノビューティーは、宇治田原優駿ステーブルでの育成を経て栗東の西園正都厩舎に入厩。2歳8月の新馬戦（新潟・ダート1800m）でデビュー勝ちをおさめると、ダートの出世レースとして名高いプラタナス賞（東京・ダート1600m）も快勝。同レースの勝ち馬エピカリスヤルヴァンスレーヴのようにダート路線を突き進むと思いきや、次走は芝のG1・朝日杯フューチュリティS（阪神・芝1600m）に挑戦し、後方から鋭く追い込んで4着。芝レースでもトップクラスの能力を示して2歳シーズンを締めくくった。

そして3歳初戦も芝重賞のシンザン記念（京都・芝1600m）へ出走したが、ここで6着に敗れると再びダート路線へ。以降は7歳秋にJpn1馬の仲間入りをするまで、一貫してダート路線を歩んできた。

その戦績の中で特筆すべきは、デビューからほぼ休みなく走りつづけてきた体の丈夫さと、どんな相手のレースでも上位に食い込んでくる堅実性。2歳時3戦、3歳時8戦、4歳時7戦、5歳時8戦、6歳時6戦、7歳時6戦とコンスタントに出走を重ね、1着8回、2着8回、3着5回、4着8回、5着1回。出走した38戦のうち30回で掲示板を確保し、21回は馬券対象となっている。まさに『馬主孝行』を絵に描いたような馬で、馬券を買うファンにとっても頼もしい存在だ。

タガノビューティーは、8歳となった今年も現役をつづけると言う。

「競走馬は競馬場で走っている時が花。できるだけ長く現役でいるほうが幸せだと思っているんです。西園調教師が来年2月で定年なので、『先生、最後までビューティーの面倒見てくださいね』と頼んでおきました」

次走は2月2日（日）の根岸S（東京・ダート1400m）を予定。その後は昨年、コンマ2秒差4着と悔し涙を呑んだフェブラリーS（東京・ダート1600m）へJBCスプリントウイナーとして臨むことになりそうだ。

一方、母のスペシャルディナーは生涯13頭の仔を産み、残念ながらタガノビューティーのJpn1勝利を見届けることなく天に旅立った。現在はタガノビューティーの1歳下の

半妹タガノタイリン（父アイルハヴァナザー）が里帰りし、その血をつないでいる。

「タガノタイリンのお腹には、タガノエスプレッソの仔が入ってるんですよ。夢があるでしょ」

そう言ってほほ笑む田沼さん。新冠タガノファームでは現在、種牡馬としてタガノエスプレッソ（父ブラックタイド）とダイシンサンダー（父アドマイヤムーン）を繫養しており、スタッフ総出で種付けも行っているそうだ。

“将来、タガノビューティーも種牡馬ラインナップに加わるかもしれませんね、”と話を向けると、「勘弁してよ。年寄りにとって種付けは重労働なんだから」と田沼さんは豪快に笑った。

Tagano Beauty

牡、鹿毛、2017年3月16日生

父／ヘニーヒューズ by ヘネシー

母／スペシャルディナー by スペシャルウィーク

生産者／新冠タガノファーム（新冠）

馬主／八木良司 氏

調教師／西園正都（栗東）

戦績／38戦8勝（Jpn I 1勝）

総賞金／3億9805万円

※2025年1月20日現在（現役馬）